平成27年度富山県文化審議会

日時　平成28年３月30日（水）13:30～15:10

場所　富山県民会館401会議室

議　　事

「新世紀とやま文化振興計画（改定版）」の改定について

【会長】　それでは、これより議事に入りたいと思います。

本日は、「『新世紀とやま文化振興計画（改定版）』の改定について」を議題といたしますので、これにつきまして事務局より説明願いたいと思います。

【事務局】　それでは、まず知事から会長に対して、文化振興計画の改定を諮問したいと思います。

＜ 諮 問 文 手 交 ＞

【会長】　続きまして、事務局から資料１から９につきまして説明をお願いします。

＜ 事 務 局 説 明 ＞

【会長】　ありがとうございました。

ただいま、「『新世紀とやま文化振興計画（改定版）』の改定」などについて事務局から説明がありました。

今ほどの事務局の説明も踏まえまして、文化振興計画の改定につきまして委員の皆様からご意見を伺いたいと思います。

委員の皆様方には、それぞれの分野でご活躍されている方々ばかりでありますが、文化をめぐる環境変化や様々な施策・事業の進捗なども踏まえた計画の改定に当たり、日頃から本県の文化活動についてお感じになっている思いを踏まえて、１、計画において直したらよいと思われる事項、２、新たな施策の方向性について、３、今後重点を置くべき施策などについて、自由にご発言いただきたいと思います。

また、文化に関する県民アンケート（案）につきましては、この審議会の後に実施されるということですので、こういう点についても調査すればよいのではないかという項目等があればご発言をお願いしたいと思います。

【○○委員】　今回お話の中で一番関心を持ちましたのは、大伴家持生誕1300年記念事業です。小学生向けの朗読や、高志の国文学館を中心とした発信事業の工夫も大変感心しております。

ただ、古典の世界というものが現代においてどれだけ意義があるかというところは、今文学においてとても問われていることで、大伴家持をどんどん引っ張っていくことが、どれほど富山の地域や富山の人間に働きかけられるのかというところを、探っていただけたらと思います。

もう１点は、アンケートについてですけど、前回のまとめを見ますと、年代の構成、プロフィールが発表されていませんので、年代とか男女とかプロフィールは最低限取っていただいて、年代による好みの違い、あと、全てが自由記述は大変ですから、あらかじめ内容を区分しておくような答え方も必要に応じてした方が焦点の絞れたアンケートになるのではないかと思います。

【○○委員】　私は、特に美術館が新しく移転するということに関して大変関心があります。富山県立近代美術館は本当に全国でも有数な近代の美術、特に20世紀の美術の収蔵品を抱えておりますし、大変優れた美術館だというふうに常々思っておりましたので、今回の移転で現代的な建物になって、美術館連携から孤立することにならざるを得なかったところが解消されると、今、日本にとても有名な作品が集まる傾向になっておりますけど、そういうものの巡回展も含めて、これから富山が素晴らしい環境に、美術館ができることもありますし、富山の美術館に人々が訪れることで大きく展開できるのではないかと大変期待しております。

【○○委員】　富山県は、それぞれ県内において地域色のある遺産が残っているわけですけど、少しずつはブラッシュアップされていますが、もうちょっと手を加えて本物志向でやっていく必要があるのかなと感じた次第です。

立山と富山湾という自然、それとともに、立山信仰に関わる建造物とか、富山湾の恵み

を受けた氷見の定置網漁とか、それに関わる漁業関連の施設とか網元のお宅、こういった大変素晴らしいものがあります。

そういったものも、なかなか一般の人目につかない状態に今ありますので、特に富山でないと見られないものを重点的にブラッシュアップして、県外はもとより世界中に発信する必要があると思っています。特に映像で出ると、世界中の人が来られる率が高い。

歴史的な建築に関わらず、祭りとか曳山とか獅子舞とか、いろんな文化が県内でいろんなところにあるので、逆に地元だけで終わってしまっている傾向がまだ強い。これだけそれぞれの地域に個性がある文化を持っているので、発信していただければとすごく感じております。

【○○委員】　私も、新しい県美術館への期待というのが大変大きくございます。

先日、プレイベントもございました。たくさんの方が期待を持って建築中のところを見学したり、いろいろなイベントがございまして、皆さんの機運が高まっているなということを大変思いました。アートとデザイン、そしてパフォーマンスというものがあって、大変刺激的でした。

これからぜひ、誰のための美術館か、基盤になるものは何かということが一番大切かなと思います。小さな子どもたちこそ、素晴らしい刺激の中で、そして、美しいものに感動する機会を多く作るために、この美術館が大きなきっかけになってくれればと期待をしているところです。本当に子どもにとって環境が大切だと思います。

ぜひ素晴らしい美術館、美術館だけではなく、そこから子どもたちが日常の小さなことも意識できるような、そして子どもを通して大人も、全ての人が幸せな時間を過ごせるようにと期待するところです。

【○○委員】　富山県内には本当に文化的な誇るべきものがたくさん散りばめられていると思います。そういうものをどうしたら私たちの暮らしの中に上手に組み込みながら生活していけるか。子どもが育つ環境の中で、様々な文化と触れ合い、五感を使って感動していきながら成長していくというのが、非常に子どもの育ちにも大きな役割を果たすと思いますので、どうやって富山の文化の中で人を育んでいくのかということを思いました。

そこに、他県から来ている大学生たちも、富山の文化に触れて、発信して、地域の人と関わってほしいということで、何かモデルプランのようなもの、年齢、性別、発達段階に

応じて提案していけるようなものがあったらいいと思いました。

【○○委員】　文化観光という言葉から１つ発想いたしますと、営み、特に衣食住、例えば合掌造りという建物の中でのいろんな食､いろんな営み､全て総合的なものが各地域に、特に五箇山とか、砺波のアズマダチ、山村、農村に形として残っていますので、こういう部分は非常にヨーロッパの方に関心があるんじゃないかと。

そういう衣食住の文化と、それを使用する形での、いわゆる晴れの場であるお祭りなど、総合的に富山の文化というのはそれそのものではないかと思います。

そういうものを、特にインバウンドに向けて、どのように発信するか、興味を持ってもらうか。隣の石川県とは、特に金沢とは違った素晴らしい分野がありますので、ぜひ磨き込んで、それをどうきちんとまとめて発信できるかというところが富山文化の振興の中に１つあってもいいんじゃないかと感じます。

【○○委員】　なかなか今、若い世代は、見る分にはいいけど、始めようという気持ちがちょっと薄れている。それで、新しい富山県美術館、伝統文化というのは、昔は遊びから始まったものですが、ここにいろんな子どもたちの遊び場があるので、そこから子どもたちが粘土、泥をいじって何か物をつくることなどで文化的なことが発展すればいいと思っております。

【○○委員】　利賀には今、非常に世界からたくさんの文化、演劇関係者が集っており、昨年は、利賀サマー・シーズンの期間だけでも、世界25カ国から大体300名の外国の方がいらっしゃいました。

県のほうでも施設を整備して、そういう方が宿泊する宿泊施設等については大変充実してきたんですが、お客さんも今海外の方が大変増えている。直行便を使って、上海、ソウル、台湾から若い演劇関係、あるいは日本の文化に興味がある方がたくさんいらっしゃいますし、長期滞在してたくさんの公演を見る方が非常に多くなりました。そういった方たちが泊まる場所というのが、過疎化が進んで民宿もどんどん少なくなっているので、去年はテントをたくさん張り、それが非常に好評でしたので、そういった海外からの若い方に長期滞在していただけるものを、と思います。

長期滞在すると、昼間演劇を見ないときに、五箇山を回ったりとか、富山の他の文化に

も触れる機会になりますので、海外からの若い方の受け入れも積極的に、と思います。

【○○委員】　美術館とか高志の国文学館の取り組みで、学校に出張授業の際、子どもたちはもちろん、保護者にも呼びかけて一緒に楽しむことができました。それを地域の方にも広げて、より文化に触れていただく機会が増えればいいと思いました。

せっかく身近に美術や文学と触れ合う機会が来るということは、地域に住む高齢者の方にもすごく良い機会であると思うので、学校とか、ＰＴＡで自治会等と協力して広めたらいいと思います。

あと、子どもたちの様子を見ていますと、本当に忙しい時間を過ごしております。休日、家族で出かけるということも最近あまりないようなご家庭が多いです。学校行事等で出かけて文化等に触れ合う機会を増やしていくのも必要かと思いますし、美術館や文学館はやっぱりちょっと敷居が高いです。家族で子どもと一緒に気軽に訪れたくなるような場所になるためには、今後、ＳＮＳ、フェイスブック、ホームページ等でＰＲして、今の若い世代の人が情報をキャッチしやすいような仕組みを、今も大分充実しているんですけど、ますますしていくとよいと思います。そうすると、ふるさとの良さに気づいたり、ふるさとを大切に思う心を育むことができるのではないかと思います。

【○○委員】　まず、中学、高校の芸術文化活動の授業時数の確保というのはなかなか難しい問題があります。学校間格差があるという状況もあります。いずれも高校入試や大学入試という現場の使命がありますから、カリキュラム上、そういった文化芸術活動の時数を増やすということは難しいのかもしれません。

そこで、放課後の文化部活動で、しっかり文化芸術活動に取り組ませたいのですが、専門的な指導あるいは準専門的な指導をしていただける専門家、指導者の不足という問題が最近あります。生徒にとっては非常に不平等な環境というか学校間格差というか、指導者不足が恒常化しています。

運動部にある派遣制度でスポーツエキスパート制度というのがあります。いつも接している先生からの本質的な高い芸術への導きといったものが、高校生あるいは中学生も含めて若い感性に訴えかけると思いますので、こういった専門家を呼べる制度といったものが文化畑にあるといいと強く思う次第です。

【○○委員】　私は、富山県というのは、すごく大がかりなイベントも誘致なさって力が入っていると思うんですが、そこに足を運ぶ人たちが限られた特定の人というのがすごく気になっています。

そういった点で、文化活動に親しむ土壌を富山県民にもっと根深く位置づけるためには、幼少期や小学校、中学校の時期に文化活動に深く関わるという体験をさせることが大事だと思います。文化活動というのは価値観によって制限されることが随分あるわけで、もっと文化活動に触れる機会を確保する体制を整備していただきたい。

見るだけではだめで、実際にお花を手に取って生けてみる、筆を取って書いてみる、そのことが成長して自分が手習いをしようというところに結びつく。世阿弥じゃないですけど、「守破離」の「守」の段階をきちっと押さえる、これが富山県の文化性を高めることにつながる。ぜひそれをやっていただきたい。

あと、地域コミュニティーが今薄れていっている。地域に愛着を持つ、育った地域に何か関わりたいという気持ちを育むという点では、祭りとか地域の行事に積極的に参加する機会を作る。

それをもっと大らかに、弾力的に子どもたちに参加させて、その感激を、他県へ行っても地域に戻りたい、関わりたいというのを育ててほしいと思います。

【会長】　いろんな意見が出て大変結構だと思っているんですけど、私も以前のこの会のスタートのときに、10年間の文化行政をどうするかということの判断をしなきゃいけないと。そのときに言ったのは、「何と何と何を、10年じゃなくて５年以内に、あるいは３年間でなし遂げましょう。」と言ったら、総論賛成なんです。ところが、各論になると、あれもこれも全部盛り込んで、という話になるので、事務局は全部お聞きして、一応網羅的に書くんですが。

富山県の文化行政、文化審議会として、３年後、５年後にこういうふうに変わりましたというふうに変えるためのご意見や視点を、事務局の県も判断していただきながら、大事だと感じたら、そこをもっと強調していただく。

網羅的に書くというのも大事だけど、強調するというのも大事で、ただ、そこで落ちたらもう落とすのかというと、そうじゃなくて、その次にはそこに重点を置いて進めていきます、というようなバランスが非常に大事。

今そういうものがないと、話はするけど実際にはそうならないで終わってしまうので、

今たくさんいい意見、お話があったんだけど、どれに集中して、何かを取り上げると何かを減らさなきゃいけないという話も出てくる。

【○○委員】　先ほど会長の言葉に「強調すべきところを強調する」というのがございましたが、以前より利賀はアジアを代表する舞台芸術の拠点である。そして、とやま世界こども舞台芸術祭2016、いわゆるＰＡＴ、これは世界三大アマチュア演劇の拠点と言っております。

何故、三大アマチュア演劇の拠点かというと、モナコとリンゲンと富山がアマチュアの演劇の拠点となっており、これは世界のアマチュア演劇界では結構常識ですが、日本では知られていない。富山でもあまり知られていないというところがありますので、プロではＳＣＯＴ、利賀がある、アマチュアではＰＡＴがあると、こういう強調の仕方というものがありやしないかと思う。

最後にもう１つ、世界への発信という意味では、グローバルな視点は、むしろ逆にローカルな視点の模索だと思うんですが、大伴家持を顕彰して追慕するというやり方は、非常に世界に対するアピール度は強いと思われます。我々自身が気づいていない、これまでの時代の素晴らしい偉人の顕彰と追慕をやっていくのは非常にいいことだと思っております。

ただ、高志の国文学館等でもいろんないいイベントをやっておりますが、若干マスコミへのアピールが弱いという気はしており、そこをご検討いただければと思います。

【○○委員】　１つ、「富山県文化審議会」というタイトルがついているのは、なかなか素敵なことではないかと思う。昨年あたり相当問題になったんですが、大学で、文系はもうだめだという話が出てきた。理系をやれば必ず役に立つ、文科系は役に立たないという話ですけど、確かに理系というのは重要で、目標を与えられれば実現する。しかし、多様な価値を考える力は文化にあるのではないか。ここを大きく膨らませていくことも重要で、両方が融合していくことが大切だと思う。

ところで、観光旅行というのは何をしているかというと、80％ぐらいはデザインを見ている。建物を見ている。歩く人の衣服を見ている。持ち物を見ている。雑貨品を見ている。ショーウィンドーを見ている。何を見ているのかというと、デザインからその都市の特性を判断している。

そうすると、富山でデザインに関するミュージアム、それをコレクションするミュージ

アムが出てくるというのはとてもいいことだと思う。これを外に向かって、日本中に向かって、ここではデザインを重視していますということが伝わっていき、あるいはメディアで発表され、ショップで展開されていくと、日本でみんなが知っていくわけですが、それは全国的な展開あるいは海外に向かっての展開かもしれない。もう１つは、ここに来ないと体験できないものを作っていくべきだと思う。それは美術館のコレクションであるかもしれないし、クリエーターを養成していくことかもしれないし、ある学校での授業かもしれないし、児童への教育かもしれないし、非常に特有なものがあるということ、ここに来て初めてわかるというものを一方で作っておく必要があるのではないかと思います。

【○○委員】　資料１に「計画改定後の状況変化等」とあって、ここに最初に４点上がっています。「北陸新幹線の開業」、これは大変大きなインバウンドのインパクトを与えているし、文化を軸にした観光によって県内の経済を活性化する、あるいは経済構造を変えることになってきます。文化を軸にして産業経済構造が変わっていくきっかけがある。

それから、「地方創生」では、文化芸術を起爆剤として地方創生を実現する、これも大きなテーマで、その一環として、文化庁では「創造都市ネットワーク日本」というものを広げようとしており、文化芸術の創造性を都市や地域の再生あるいは過疎の克服に生かすというユネスコなども取り組んでおります世界的なネットワークがございます。

ユネスコでは116の都市が入っておりまして、日本では７つの都市が加盟している。「創造都市ネットワーク日本」は、70自治体までまいりました。富山県では高岡市、南砺市、氷見市、この３つがそれに加わっており、そのことが、次のテーマに関わってくるわけです。2020年東京大会とオリンピック・パラリンピックの東京大会、これは東京のことではないのです。

文化庁の視点から見ますと、2012年のロンドンオリンピックが行われたときには、2012年の夏だけが大会ではなくて、その前の大会から12年の夏までの４年間にかけて、スポーツのみならず文化プログラムというものが大規模に展開しました。

その根拠というのは、クーベルタン男爵が近代オリンピアードを復興、再生するときに、オリンピックというのは文化とスポーツと教育の融合した祭典であるというふうにオリンピック憲章に書いてあるわけです。ロンドンというのは、その原点に立ち戻って文化予算も大幅に増やし、４年間で約17万件から18万件のアートプロジェクトをイギリス全土で展開したわけです。

例えばバーミンガムだとかスコットランドとか、そういう地方都市でもやった。つまり、東京でオリンピック・パラリンピックの大会があるから、東京だけに集中的に何かを起こそうというのではなくて、それをきっかけにして日本全国が文化芸術で元気になっていくという方法です。今のところ「ビヨンド2020」というもので、2020を超えて日本全体が文化芸術の大国になっていく。

そのイメージは、「文化プログラムに向けた準備・プレイベント」、「文化プログラム」、「2021年以降、真の『文化芸術立国』実現へ」という流れに沿いながら、リオの大会が今年の夏に終わった時点から東京大会が始まるという考え方で、2016年の秋に、キックオフイベントとしてスポーツ・文化・ワールド・フォーラムをやります。

このオリンピック文化プログラム、文化庁は文化力プロジェクトという言い方をしているんですが、これも各県単位で2020あるいは2020を超えて計画を作っていく。計画を作っていくときに、ロンドンに倣って、専門家の集まる独立性の高い行政委員会、アーツカウンシルを全国、つまり全国版を置くんですが、地域版も置きましょうと。実際、今、アーツカウンシル東京がありますし、大阪も府市一体でアーツカウンシルがある。沖縄県にもアーツカウンシルがある。こういうアーツカウンシルを置いて、アーツコミッショナーという専門家を採用して事業の全体をリードしていく。

今年度から体制づくりも含めて取り組むことになっておりますので、その流れというものを１つ念頭に置いてスケジュールを立てていく、あるいは目標年次を決めていくとよろしいかと思います。

それから、資料３ですが、ここに３本柱を掲げていて、「文化活動への幅広い県民の参加」「質の高い文化の創造と世界への発信」ということで、これは英語で言いますと「access」と「excellence」という２つの要素です。質の高いものを各地域から出していく。そして、広く市民あるいは住民が参加する。

３番目が他の分野との連携ということで、産業あるいは観光業と文化との連携ということですが、今回、オリンピックというのはパラリンピックとセットで行うものです。障害を持ったアスリートも加わるんですが、ロンドンでやったときは、障害を持ったアーティストも招いている。障害者アートの領域についてもプログラムを走らせようということになっていて、幾つかの県では、障害者アートを新しく重点的に取り上げてきております。

富山県でもそうした活動があるんだろうと思いますが、分野を超えた文化芸術から他の分野と連携していくという広がりを意識していけば、地方再生により接近しやすくなると

考えています。そういったことで、できるだけ連携をしていくということが必要だと思います。

最後に、大伴家持の話が出たので、実は先週、私は宮城県の多賀城市に行っておりました。多賀城市で市民オペラをつくろうという話があったんですが、あそこは大伴家持の終焉の地ですよね。考えたら、大伴家持というのは富山、高岡だけの専売特許じゃなくて、あちこちにあるわけです。連携していけばもっと影響力があります。文化のテーマというのは、保有性はあるんだけど、保有性と同時に連携していけると広くなります。

そういったテーマですと、東アジア文化都市事業は日中韓で毎年１つの文化都市を選定して、文化芸術で都市を再生する事業で、日本では、2014年は横浜、2015年が新潟です。今年は奈良がスタートしており、中国のパートナー都市は寧波です。これは、鑑真和尚がそこから来られた。それから、遣隋使、遣唐使や遣明使の流れがある。奈良はまさにそこと連携しているわけです。そして、韓国は済州道自治特別区ですが、これは中継地です。

そうすると、東アジアにおける古代からの文化の連携が再び光が当たってきて、地域と地域や都市と地域、都市と都市が文化交流しながら互いの理解を深めて、そして平和を拡大して相互の経済発展につなげるということを富山県でもぜひ考えていただきたいと思います。